

~~~~~  
論 説  
~~~~~

100 年前の北朝鮮経済

木 村 光 彦*

1. 序

日本統治下の朝鮮経済を論じた著作は膨大な数にのぼる。戦後の韓国経済とのつながりに関する研究もおおい。そこでは、戦前からの遺産はどのようなものであったのかという問題について、韓国経済史の研究者が議論をかさねてきた。北朝鮮については事情がことなる。今日、北朝鮮経済論は隆盛し、韓国経済論と区別された独自の研究分野を形成している。¹⁾ しかし歴史的な視野をもつ研究はとほしい。韓国経済史に対応する北朝鮮経済史は未開拓である。²⁾ それは現在でも、韓国経済史の付論以上のものではない。³⁾ 世代をこえて南北分断が継続するなか、あらたな研究分野として北朝鮮経済史を構想する時期がきている。本稿はそのころみである。朝鮮半島の本格的な近代化は、およそ 100 年前の日韓併合 (1910 年) にはじまる。本稿は当時の経済状況——いわゆる初期条件を考察する。以下、地域を定義し、自然条件を要約する。つぎに産業を展望したのち、畜牛について論じる。さらに食物消費、教育普及のデータを検証する。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) これは、北朝鮮経済論の方法論が確立していることを意味しない。木村光彦「北朝鮮経済の分析方法：文献と統計」Discussion Paper D97-15, 1997 年, http://www.ier.hit-u.c.jp/COE/Japanese/discussionpapers/DP97.15/97_15.html 参照。
- 2) 近年、前近代および近代朝鮮 (韓国) の経済史研究は長足の進歩をとげている。以下は、李朝末期の経済停滞の実情と要因を展望したすぐれた論文である。李榮薫 (木村拓訳) 「数量経済史から再検討した 17~19 世紀の朝鮮経済」『地域総合研究』(鹿児島国際大学附置地域総合研究所) 第 31 巻第 2 号, 2004 年。
- 3) 以下の書物は最近の大作で、朝鮮半島の経済を中世から現代まで論じているが、南北別考察は戦後に限定されている。李憲昶 (須川英徳・六反田豊監訳) 『韓国経済通史』法政大学出版局, 2004 年。

2. 地域と自然条件

(1) 地域

李朝末期、朝鮮半島（韓半島）の行政区域は以下の「道」にわかれていた：慶尚北道，同南道，全羅北道，同南道，京畿道，忠清北道，同南道，江原道，黄海道，平安北道，同南道，咸鏡北道，同南道。これらのうち、京畿・江原道の一部，咸鏡（南北）道・平安（南北）道・黄海道のほぼすべてが、現在の北朝鮮国家（朝鮮民主主義人民共和国-DPRK）の領域である。⁴⁾ 併合まえ、北東部の咸鏡道は北韓あるいは北閔とよばれた。この言葉はまた、しばしば北緯 38-39 度線以北を漠然とさした。併合によって大韓帝国が日本帝国内の 1 地域——朝鮮になると、北韓は北朝鮮ないし「北鮮」という言葉に代わった。⁵⁾ これに対応し、半島北西部の平安道・黄海道は「西鮮」、南部の慶尚道・全羅道は「南鮮」、中部の京畿道・忠清道・江原道は「中鮮」とよばれるようになった。以下、この意味での北鮮・西鮮を北朝鮮、中鮮・南鮮を南朝鮮とよぶ。⁶⁾

(2) 地勢，気候

北鮮は豆満江（図們江）ぞいに中国と接する。その大部分は山地，高原である。西鮮の対中国境には鴨緑江が流れる。同江は流量，延長の点で日本にみられない大河である。西鮮も，北鮮ほどではないが，多くが山地である。平野が

4) 古都，開城はかつて京畿道の一部であった。北緯 38 度線以南にあるため，日本の敗戦のち米軍の占領下におかれたが，朝鮮戦争の結果，現在は DPRK に属する。

5) 1913 年発行の以下の書物は咸鏡道をさして北朝鮮ないし北鮮と呼び，その概況を紹介している。山田天山・安藤北洋『北朝鮮誌』上下，東洋書院，2001 年（復刻）。

6) 北鮮をはじめ○鮮という言葉は，今日一般に差別語とみなされている。しかしその根拠はあきらかではない。わが国ではこの言葉は戦後もふつうに使われていた。とくに DPRK については，これを北鮮とよぶのが習わしであった。70 年代前半に左派の朝鮮研究者・運動家がこれに反対し出版社等に抗議をおこなった結果，使用されなくなった。そのねらいは，日本で DPRK の正式国名をひろめ，認知させる点にあったと考える。本稿では，歴史的な地域名としてあえてこの言葉をつかう。なお，「鮮人」という言葉には，戦前から侮蔑的なニュアンスがあった。齋藤力『「北鮮」と呼ぶ人間の正体：よど号事件に関連して』『朝鮮研究』第 92 号，1970 年，川崎勲『「広辞苑」の「北鮮」「鮮人」の項の誤りについて』同，第 124 号，1973 年，内海愛子『「鮮人」ということば』同，第 135 号，1974 年，内海愛子・梶村秀樹『「北鮮」「南鮮」ということば』同，第 150 号，1975 年。

100年前の北朝鮮経済

表1 気温, 降霜, 降雨量

測候所所在地		北 鮮		西 鮮	
		元山	城津	平壤	龍岩浦
平均気温(度)	1月	-3.0 (-7.8)	-6.1 (-10.9)	-7.2 (-12.2)	-8.1 (-12.7)
	8月	22.9 (27.3)	21.3 (24.8)	23.8 (28.5)	22.4 (27.3)
初霜平均月日		10.13	10.15	10.12	10.9
終霜平均月日		4.17	4.17	4.24	4.25
年降雨量(mm)		1,428	668	873	832
7-9月降雨量(mm)		807	318	539	472

(注) 測候所の開設時から1914年までの累年平均値。測候所の開設年は以下のとおり：元山, 1904年；城津, 1905年；平壤, 1907年；龍岩浦, 1904年。平均気温欄の()内はそれぞれ, (平均)最低, 最高気温を示す。

(出所) 朝鮮総督府『朝鮮総督府統計年報(大正3年)』同府, 京城, 1914年, 10-20頁(以下, 特記しないかぎりいずれのデータも同年報, 各年版による)。

ひろがるのは, 平安南道の清川江下流(博川, 安州地方)・大同江下流(平壤地方)と黄海道の沿海地域にすぎない。これは, 平野部が多い南朝鮮なかでも南鮮と対照的である。

朝鮮半島とくに北朝鮮の気候は, 日本にくらべて大陸的である。すなわち, 少雨・乾燥, 冬季寒冷・夏季高温を特色とする。梅雨の時期は南鮮の一部地域以外, 日本のようにはっきりしていない。北朝鮮の多くの地域では降雨量が年間1,000mm以下で, かつ7-9月に集中する(表1)。1月は平均気温が零下になる。春はおそく, 秋ははやい——終霜は4月中・下旬, 初霜は10月初・中旬である。しかし8月の平均気温は20度を超え, 最高気温は30度ちかくまで上昇する。そのため北鮮の一部をのぞき, 米作が可能である。

3. 産業

(1) 基本構造

1910年の『朝鮮総督府統計年報』は, 朝鮮人職業別(産業別)戸口としてつぎのデータをしるす(表2)。当時のデータには調査もれがかなり存在するもの

の、産業構造の基本傾向を知るには十分である。これによると、朝鮮全域で農業戸口比率が圧倒的にたかかった。北朝鮮は南朝鮮よりたかく、いずれの道でも80%以上、最高は咸鏡北道の91%、最低は平安南道の81.4%であった。

たかい農業戸口比率は、ひくい都市化率に対応した。北朝鮮の主要市街地戸口数は全戸口数にたいし、5%内外にすぎなかった(表3)。このように当時の朝鮮社会は、農業を基礎とした村落から成っていた。北朝鮮は南朝鮮よりもいっそうこの傾向が顕著であった。

表2 朝鮮人職業別戸口, 1910年5月10日現在

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道		
農業	155,145 (84.0%)	72,373 (91.3%)	193,358 (87.6%)	151,845 (81.4%)	156,589 (87.1%)	637,730 (76.4%)	969,725 (82.9%)
漁業	3,373	900	888	1,366	732	8,809	20,318
工業	1,876	251	1,672	1,393	2,039	10,367	11,265
鉱業	691	6	262	323	179	988	1,130
商業	9,959	2,590	11,500	14,143	10,273	58,304	77,774
官公吏	1,161	412	827	682	723	6,741	5,260
両班	874	373	735	129	567	37,466	21,023
儒生	1,303	831	1,109	740	657	7,349	9,252
日稼	6,404	434	5,622	9,008	4,562	34,679	33,544
その他	2,137	437	3,084	4,314	2,438	16,433	12,454
無職	1,876	679	1,624	2,513	985	15,951	7,392
合計	184,799	79,286	220,681	186,456	179,744	834,817	1,169,137
朝鮮人 現住戸 口総数	164,116	77,907	218,776	186,455	179,229	768,491	1,154,982

(原注) 職業ハ戸主ニ就テノ調査ニシテ同一戸主ニシテ二三ノ職業ヲ兼ヌル者ハ各別ニ之ヲ計上セシニ依リ現住戸口ト符合セス。職業中両班トハ古昔文武官ヲ奉セシ者ノ子孫ニシテ儒生トハ漢学ヲ以テ家ヲ立ツル者ナリ。

(注) 農業欄の()内は合計にしめる割合(中鮮, 南鮮の道別数値は以下のとおり: 京畿67.6%, 忠南77.3%, 忠北85.6%, 慶北85.8%, 慶南81.1%, 全南79.4%, 全北86.2%)。

100年前の北朝鮮経済

表3 主要市街地現住戸口, 1910年12月末日現在

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道		
市街地 個所	7	7	11	5	9	19	39
朝鮮人 戸数	10,908 (6.6%)	3,905 (5.0%)	10,936 (5.0%)	12,512 (6.7%)	7,207 (4.0%)	73,934 (9.6%)	57,256 (5.0%)
内地人 戸数	1,741	1,993	931	3,248	1,370	17,145	14,969

(注) ()内は表2の朝鮮人現住戸口総数にしめる割合。

表4 定期市関連指標, 1911年

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道		
A. 市場数	59	28	97	82	43	321	454
B. 総面積 (km ²)	31,978	20,347	16,744	14,939	28,468	54,609	53,755
C. 市場密度, (A/B) x1,000	1.8	1.4	5.8	5.5	1.5	5.9	8.4
D.1 市場当り 戸口数	2,960	2,670	2,290	2,314	4,324	2,464	2,590

(注) D 欄 = 朝鮮人現住戸口総数 / 市場数。

商品取引の場は主に農村の市であった。それは5日ごとに開く定期市で、農民の徒歩1日行程を基準に全土に分布した。市でのおもな交換手段は銅銭と物々交換であった。⁷⁾ 1911年、市の総数は北鮮87、西鮮222、中鮮321、南鮮454であった(表4)。分布密度(単位面積あたりの数)は北鮮と、西鮮の平安北道でひくく、西鮮の黄海道と南鮮でたかかった。すなわち、山がちの地方は市場数がすくなく、平坦な地方ではおおかった。1市場あたりの戸口数は平安北道を

7) 李朝末期の貨幣については、木村光彦・浦長瀬隆「開港後朝鮮の貨幣と物価」『社会経済史学』第53巻第5号、1987年参照。

のぞき各道とも 2-3 千戸であった。このように市場の分布は、人口にたいしてほぼ均等であった。⁸⁾

(2) 農業

前章でみた自然条件から、北朝鮮の農業は 1 年 1 作の畑作が主であった；1914 年、全耕地面積中、畑面積は北朝鮮でおよそ 90%，西朝鮮で 75-85%（以下、表 5）。焼畑（「火田」）・休耕地もおおく、畑面積にしめる割合は、咸鏡南道で 32.6%，

表 5 耕地面積，1914 年

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮	計
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道			
総面積 (千町歩, 以下同)	248.7	169.5	351.8	301.7	339.4	757.3	790.9	2,959.1
田面積	34.3	6.6	85.7	47.7	51.7	374.1	489.3	1,089.3
畑面積	214.4	162.9	266.1	254.0	287.7	383.2	301.6	1,869.8
2 毛作田面積	0.0	-	0.1	-	-	18.1	120.5	138.7
焼畑または 休閑畑面積	69.8	30.8	12.6	15.7	73.0	26.5	9.0	237.5
自作田面積	18.0	4.8	27.2	16.2	18.3	114.2	179.6	378.3
自作畑面積	157.0	140.5	110.9	118.9	150.4	197.7	167.3	1,042.8
畑面積 / 総面積 (%, 以下同)	86.2	96.1	75.6	84.2	84.8	50.1	38.2	63.2
焼畑・休閑地 / 畑面積	32.6	18.9	4.7	6.2	25.4	6.9	3.0	12.7
自作田 / 田面積	52.5	72.7	31.7	34.0	35.4	30.5	36.7	34.7
自作畑 / 畑面積	73.2	86.2	41.7	46.8	52.3	51.6	55.5	55.8
農家 1 戸あたり 経営面積 (町歩)	1.58	2.50	1.65	1.78	1.94	1.06	0.72	1.14

(注) 焼畑または休閑畑面積は 1910 年の数値（京城府の分はふくまない）。

8) より詳細な議論は以下を参照。木村光彦「定期市」中村哲他編『近代朝鮮の経済構造』日本評論社，1989 年。

100年前の北朝鮮経済

平安北道で25.4%にたった。主たる所有形態は自作であった。自作比率は北鮮でとくにたかく、畑では70%を上回った。これらの点で、南朝鮮とのちがいは大きかった。そこでは田面積がおおく、かつそのうち自作地は40%以下にすぎなかったからである。農家1戸あたり経営面積は北朝鮮でおおきく、とくに咸鏡北道、平安北道ではそれぞれ2.5、1.9町歩を記録した。灌漑設備はすくなく、田の大半は天水田、または水利不安全田であった。⁹⁾

1911年の統計によると、作付面積は北朝鮮全体で、粟が最大であった(表6)。これに次ぐのは、北鮮では大麦や稗、大豆、西鮮では米、大豆であった。米は咸鏡北道をのぞき、ひろく栽培された。トウモロコシの栽培は平安北道以外、すくなくかった。

表6 主要作物の作付面積，北朝鮮，1911年 (千町歩)

	北 鮮		西 鮮		
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道
米	23.8	3.5	69.9	43.2	48.3
大麦	25.1	34.1	6.9	10.6	4.4
小麦	3.7	0.6	45.6	17.0	1.0
燕麦	23.6	11.7	0.2	1.4	1.7
大豆	21.2	34.4	32.0	31.4	37.7
小豆	16.5	2.0	2.6	39.0	31.2
粟	44.1	49.0	88.9	81.0	80.0
稗	29.5	11.8	5.6	5.4	20.3
モロコシ	6.5	3.4	5.1	20.4	14.3
トウモロコシ	9.5	3.0	1.4	7.5	33.7
在来棉	0.0	-	3.5	4.4	5.3
大麻	1.4	1.2	0.2	0.4	3.9
タバコ	1.1	0.6	1.0	1.6	2.8

9) 農林省熱帯農業研究センター編『旧朝鮮における日本の農業試験研究の成果』農林統計協会，1976年，25頁。

米の反収は西鮮と咸鏡南道で0.8石前後であった(1910-12年平均)(表7)。これは南鮮の反収(1.1石)を大きく下回った。北朝鮮と気象条件の似た本州北部の米反収は当時1.5石水準であったから、これとくらべると、約半分にすぎなかった。¹⁰⁾北朝鮮では、大麦、粟、大豆といった畑作物の生産性もひくかった。一般に反収1石をはるかに下回り、中鮮、南鮮におとった(表8)。

肥料は糞灰、厩肥、草肥など、大半が農家の自給自足であった。¹¹⁾糞灰は、オンドル用燃料の残り灰と人糞をまぜて作った。¹²⁾畑作では無肥のばあいも少なくなかった。併合当時、干鰯、獣(牛、豚、犬)骨の生産量は多かったが、それらは国内の肥料用ではなく、もっぱら(対日)輸出品であった。¹³⁾

南北をとわず、朝鮮の畑作には日本とことなる独特の栽培技術が存在した。¹⁴⁾

表7 米生産統計, 1910-12年平均

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海 道	平安南道	平安北道		
生産量(千石)	202.9	29.8	627.6	321.0	367.3	2,692.6	4,7280.0
反収(石)	0.83	0.60	0.88	0.86	0.75	0.91	1.12

表8 主要な畑作物の反収, 1910-12年平均 (石)

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道		
大麦	0.77	0.48	0.59	0.69	0.66	1.29	1.71
粟	0.82	0.66	0.89	0.63	0.58	0.92	1.08
大豆	0.62	0.46	0.72	0.48	0.41	0.79	0.73

10) 「本州北区」-新潟、福島、宮城、山形、秋田、岩手、青森県。データは『日本帝国統計年鑑』各年による。

11) 『韓国土地農産調査報告 黄海道』(編者、発行者、発行年記載なし)136頁。

12) 前掲、農林省……、106頁。

13) 同、104頁。

14) 同、90-96頁。

それは粗放ではあるが、自然条件に適合したものであった。たとえば、粟と大豆・小豆の混作または間作がそうである。これは、乾燥がちで降水量にむらがある条件下、作物の「全失」をさけるうえで合理的であった。輪作とくに西鮮でみられた2年3作の輪作も、すぐれた栽培法であった。そこでは、麦、粟など禾木科の作物と大豆、小豆などマメ科の作物を交互に栽培した。その意義は、少ない施肥で地力を維持する点にあった。

朝鮮農業の他の特徴は、広汎な牛の利用にあった。これは次章で詳論する。

(3) 工業

1910年前後、工場工業は、移住日本人による小規模なものが都市に散在するにすぎなかった。朝鮮人の工業は大部分、手作業による農家副業であった。労働者を雇用する専業経営も存在したが、おおくはなかった。¹⁵⁾ おもな工業製品は味噌、醤油、酒など食料加工品と繊維製品であった。食料加工品は各農家が自給用に生産した。農村綿工業とくに綿糸生産は開港(1876年)以後、日本、英国の工場製品におされ衰退した。それでも併合時、全朝鮮で綿糸、綿布生産にそれぞれ53万戸、220万戸、うち北朝鮮で同、10万戸、63万戸が従事していた(表9)。西鮮の平野地帯では、自家栽培の棉を使って農家の婦女子が紡糸、製織をおこなった。

北朝鮮では養蚕、製糸、絹織もさかんであった。咸鏡南道永興郡は北朝鮮随一の蚕業地として知られた。同郡の蚕業農家は機業には従事せず、仲買人をつうじて繭を販売した。繭を購入した農家は、器械を使わずに手作業で糸をとった。おもな絹製品は紬で、咸鏡南道では元山、咸興がその重要仕向地であった。¹⁶⁾ 平安北道の状況も同様であった。同道の鉄道沿線の市ではおおくの繭が販売された。紬産地は徳川、泰川、寧辺、義州、亀城郡などであった。¹⁷⁾ なかでも泰川、寧辺紬はその名をひろく知られた。¹⁸⁾ 他方、平安南道成川郡、江東郡にかんす

15) 前掲、李憲昶、213-19頁。

16) 『朝鮮農會報』第5巻第4号、1910年、25-26頁。

17) 『韓国中央農會報』第2巻第2号、1908年、45頁。

18) 『朝鮮』第37号、1911年、28-29頁。

表9 主要工産物, 1911年

	A. 北鮮	B. 西鮮	C. 中鮮	D. 南鮮	E. 合計	F. Eの内, 朝鮮人 による分
生糸 生産量(貫)	460	3,581	4,530	5,555	14,156*	14,140
生産額	15,220	101,958	107,499	133,393	358,070	357,569
製造戸数	n.a. [4,039]	n.a. [15,184]	n.a. [22,860]	n.a. [24,348]	62,618 [66,431]	62,615
麻糸 生産量(貫)	49,490	29,576	39,054	114,223	233,343	233,343
生産額	84,048	75,166	74,029	188,086	422,179*	422,179
製造戸数	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	207,082	207,082
綿糸 生産量(貫)	—	39,773	26,537	131,400	197,710	197,710
生産額	—	100,646	74,462	355,476	530,584	530,584
製造戸数	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	255,174	255,174
絹布 生産量(疋)	10,754	54,293	30,788	28,011	123,846	123,712
生産額	46,347	207,325	157,489	128,361	539,522	537,881
製造戸数	n.a. (5,825)	n.a. (23,739)	n.a. (15,659)	n.a. (12,854)	43,731 (58,007)	43,726
苧麻 生産量(疋)	—	—	101,628	38,189	139,817	139,817
生産額	—	—	353,348	95,442	448,790	448,790
製造戸数	n.a. (62)	n.a. (—)	n.a. (17,748)	n.a. (23,278)	39,179 (41,088)	39,179
麻布 生産量(疋)	254,130	150,133	144,162	443,925	992,350	992,229
生産額	472,973	321,546	263,900	698,173	1,756,592	1,756,388
製造戸数	n.a. (132,358)	n.a. (78,576)	n.a. (119,356)	n.a. (267,287)	361,621 (597,577)	361,621
綿布 生産量(疋)	1,513	425,816	326,357	746,584	1,500,270	1,494,444
生産額	3,971	629,991	470,622	1,134,684	2,239,268	2,224,857
製造戸数	n.a. (2,189)	n.a. (216,157)	n.a. (93,388)	n.a. (397,890)	479,804 (709,624)	479,795

100年前の北朝鮮経済

(表 9, 続)

	A. 北鮮	B. 西鮮	C. 中鮮	D. 南鮮	E. 合計	F. Eの内、 朝鮮人 による分
藁繩 生産量 (千束)	32	1,547	2,294	1,647	5,520	5,423
生産額	1,613	88,103	131,413	117,552	338,681	332,032
製造戸数	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	638,052	638,050
朝鮮鞋 (革製) 生産量 (足)	8,104	53,992	112,660	58,520	233,236	233,236
生産額	9,617	72,004	119,477	70,379	271,477	271,477
製造戸数	n.a. (70)	n.a. (461)	n.a. (152)	n.a. (405)	3,356 (1,088)	3,356
朝鮮酒 生産量 (石)	32,988	72,127	238,270	396,452	739,847	738,977
生産額	860,037	1,252,967	2,969,927	4,311,811	9,394,742	9,363,692
製造戸数	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	254,062	254,062
朝鮮醬油 生産量 (石)	63,334	137,571	227,486	328,286	756,677	756,677
生産額	917,246	1,337,132	2,346,341	3,325,658	7,926,377	7,926,377
製造戸数	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	2,183,301	2,183,301
朝鮮味噌 生産量 (千貫)	1,526	1,664	3,614	4,329	11,133	11,133
生産額	400,039	357,036	582,195	766,191	2,105,461	1,964,393
製造戸数	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	2,089,195	2,089,195
金属製品 生産量 (個)	78,704	459,448	637,050	585,949	1,761,151	1,183,961
生産額	75,358	374,183	436,064	303,788	1,189,393	890,899
製造戸数	n.a. (1,010)	n.a. (1,109)	n.a. (942)	n.a. (1,210)	1,849 (4,271)	1,729

(注) 金属製品は金銀器、銅器、その他金属器 (農具はふくまない)。

本来、A+B+C+D=Eであるが、*印は原数値に誤りがあり、合計値があわない。EとFの差は内地人による生産分。各数値は工産統計による (製造戸数の [] 内のみ農産統計)。 () 内は 1914 年の数値。

る記述によれば、同地方では繭は主として自家用で、販売用はすくなかった。¹⁹⁾ 織機は一般に、1戸1台の地機であった。

前表9で製造戸数と生産額をみると、金属製品の1戸あたり生産額は繊維製品のそれよりおおきく上回った（たとえば西鮮では生糸の7円にたいし300円超）。これは、生糸生産が純然たる農家副業であったのにたいし、村々の金属製品の生産が相対的に専門化していたことを示唆する。

(4) 鉱業

朝鮮とくに北朝鮮は古来、金銀の産地として知られた。²⁰⁾ しかし李朝政府はかならずしも金銀鉱山の開発に積極的ではなかった。²¹⁾ 日本では戦国期から金銀採掘量がおおきく増大し、江戸期の貨幣経済発展の基礎となった。朝鮮の歴史はこれと大きくことなった。朝鮮の近代的な鉱業開発は19世紀末、外国人がはじめた。1885年、平安北道雲山鉱山の採掘権を米国人が獲得し、のちに米国の会社が採掘に従事した。²²⁾ 一方、平壤が無煙炭の産地とわかると、日本海軍がこれに注目し、1880年代に調査をはじめた。²³⁾ 1907年、韓国統監府は平壤鉱業所を設置し、開発に着手した。1914年、その無煙炭販売量は11.8万トン、煉炭販売量は15.1万トンであった。²⁴⁾ 平壤炭の総埋蔵量は当時、1億トンといわれた。²⁵⁾ そのほか、併合時までに北朝鮮では、鉄、黒鉛、銀、銅、鉛などの鉱区が設定された。1914年、北朝鮮の鉱区数は692で、朝鮮の全鉱区数(1,118)

19) 『韓国中央農会報』、第3巻第1号、1909年、16頁。

20) 北鮮の検徳銀山はとくに有名で、文祿の役のさい、加藤清正が一時これを支配下においた。木村光彦・安部桂司「北朝鮮咸鏡南道端川郡の鉱山」『青山国際政経論集』第64号、2004年。

21) 前掲、李憲昶、220-29頁。くわしくは、柳承宙『朝鮮時代鉱業史研究』高麗学校出版部、ソウル、1994年参照。

22) 酒井敏雄『日本統治下の朝鮮 北鎮の歴史』草思社、2003年、5-6頁、長田彰文「1930年代朝鮮雲山金鉱経営・採掘権回収をめぐる日米間交渉」『日本植民地研究』第23号、2011年、19頁。

23) くわしくは、木村光彦・安部桂司『北朝鮮の軍事工業化』知泉書館、2003年、6-7頁参照。

24) 『総督府統計年報』1914年版。

25) 『朝鮮及満洲』第69号、1914年、97頁。

の6割を占めた(表10)。しかし金以外の鉱産額はすくなく、将来の開発をまつ状態にあった(表11)。

4. 畜牛

(1) 育牛・牛耕

日本人観察者は一様に、朝鮮の畜牛の多さに目をひかれた。たとえば、1911年刊行の書物はつぎのように記した：「従来朝鮮の如く諸種の生産事業萎靡して振興せざる地に於て独り産牛事業のみ超然として進歩せるは大に奇異とする所なり。」²⁶⁾ 1910年代初、日本、朝鮮とも畜牛総数は130万頭であった。朝鮮の人口は日本のその3分の1以下であったから(1,500万：5,000万)、人口比で見るとたしかに、朝鮮は日本よりはるかに牛が多かった。

表10 許可鉱区数, 1914年

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮	計
	咸鏡 南道	咸鏡 北道	黄海 道	平安 南道	平安 北道			
金銀鉱	39	4	30	54	164	154	41	496
銅鉱	5	2	1	1	—	3	8	20
鉄鉱	5	3	46	31	6	10	6	107
水銀鉱	—	—	1	1	—	—	—	2
金銀銅鉛亜鉛鉱	7	3	6	2	10	23	25	76
黒鉛	13	6	2	6	47	15	14	103
石炭	3	18	2	23	—	5	18	69
砂金	52	5	11	50	33	52	40	243
砂鉄	—	—	—	—	—	2	—	1
計	124 (87)	41 (20)	99 (76)	168 (134)	260 (170)	264 (202)	162 (133)	1,118 (822)

(注) ()内は休業鉱区(内数)。

26) 肥塚正太『朝鮮之産牛』有隣堂書店, 1911年, 2頁。

表 11 鉍産額, 1914 年

(千円)

	北 鮮		西 鮮		
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道
金	5.6	-	1,046.8	72.3	4,261.1
金鉍	1.2	-	32.5	-	56.2
砂金	42.0	1.4	3.4	300.7	0.1
金銀鉍	-	-	-	-	-
金銅鉍	-	-	431.9	-	-
銀鉍	-	-	1.4	-	0.2
銅鉍	-	-	-	-	1.6
鉄鉍	-	-	267.6	0.0	-
黒鉛	59.0	0.1	-	-	31.7
石炭	8.1	17.9	-	713.7	-
その他	-	-	-	-	-
計	115.9	19.4	1,783.5	1,086.8	4,351.0

(注) 全朝鮮の鉍産総額 = 8,402.6 千円。

のみならず、朝鮮の牛(黄牛)は優秀であった。観察者によれば、朝鮮の牛は、体格、受胎力、強健さ、粗食・悪環境にたいする耐性の点で、日本の牛より格段にすぐれていた。性格上の特性もあった。それは温和伶俐なことで、御者の命におとなしく従う姿は驚異的とすらいわれた。²⁷⁾ 朝鮮農民は昔から牛を家族同様といえるほど大事にあつかい、その育成・改良につとめた。上記の特性はその成果であった。

朝鮮には乳牛はほとんどいかなかった。農民は牛を、3-8 歳ぐらゐまで耕作・牽引用に飼育し、その後は食肉用として販売した。他方、朝鮮には馬耕の習慣がなかった。馬は非常にすくなく(1914 年、総数 5 万頭)、体格も貧弱であった。農民はせまい耕地でも、人力ではなく牛を使って耕作した。朝鮮では伝統

27) 同, 18-19, 26 頁。

的に、耕地面積を牛耕何日分であらわした。これは牛耕の普遍性、重要性を象徴する。牛耕は一般に、北朝鮮では2頭犁、南朝鮮では1頭犁でおこなわれた。農民は牛の使役に長け、子供でもその技能を身につけていた。

育牛・牛耕の発達要因として日本人観察者は、以下のような点を指摘した：土地面積に比して人口が希薄である、放牛可能な山野が多い、風土気候が適す、住民が牛の飼養・管理に堪能である。²⁸⁾ これらは表面的な観察以上のものではない。アジア農業全体をみると、朝鮮のこの状況はかならずしも奇異ではない。むしろ、この点では近世日本が特異であった。よく知られるように、そこでは牛耕(および馬耕)が衰退し、人力による耕作に替わったからである。いわゆる勤勉革命は、朝鮮をはじめアジアに普遍的な現象ではなかった。²⁹⁾ 日本人観察者のおどろきは、かれらが自国の事情にとらわれ、せまい視野を脱しえなかったことを示す。

(2) 貸借・預託

1914年、朝鮮全体の畜牛総数は134万頭で、これを農家戸数と対比すると約50%であった(表12)。地域別には、北鮮では農家1戸あたりほぼ1頭もしくはそれ以上、西鮮の黄海道、平安南道および南朝鮮では約0.4-0.5頭であった。このように、育牛がさかんであったとはいえ、北鮮をのぞき、牛は各農家が保有するほど多くなかった。じっさいには分配が不平等で、7、8頭から数十頭を保有する富農がいた反面、牛をもたない貧農が多数存在した。

それでは、牛をもたない農家はどのように耕作したのか。それは、他人の牛

28) 同、2-5頁。

29) 朴二澤によれば、李朝前期の朝鮮では、奴隷労働にちかい強制労働を利用して両班地主が農業経営をおこなっていた。後期にはそれがより自由度のたかい小作労働に変わった。その結果、農民の勤労意欲が向上し、小農経営が発展した。かれはこれを勤労革命と呼んだ(朴二澤「朝鮮後期の経済体制：中国・日本との比較論的接近」李大根他『あたらしい韓国経済発展史：朝鮮後期から20世紀高度成長まで』ナナム出版、ソウル、2005年(韓国語)、46-47頁)。しかしこれは十分な実証と考察にもとづく議論ではない。朴基柱はこれと対照的に、李朝後期、17世紀から19世紀にかけて土地生産性が1/3に低下したという。その主因は灌漑施設の不備、山林荒廃、自然災害、地力枯渇であった。朴基柱「朝鮮後期の生活水準」同上書、84-87頁。

表 12 畜牛頭数, 1914 年

		A. 畜牛総頭数	B. 農家戸数	C. A/B (農家 1戸あたり頭数)
北 鮮	咸鏡南道	153,037	156,988	0.97
	咸鏡北道	97,045	67,767	1.43
西 鮮	黄海道	81,321	213,050	0.38
	平安南道	88,781	169,099	0.53
	平安北道	157,074	174,638	0.90
中 鮮		336,066	709,130	0.47
南 鮮		425,077	1,090,518	0.39
	計	1,338,401	2,581,190	0.52

(注) 農家戸数は朝鮮人のみ。

を使うことによってであった。これには大別して以下の3種があった。³⁰⁾ ① 耕作委託: 牛をもつ農民に耕作を委託する。② 短期貸借: 必要におうじて牛を借り、みずから使役する。③ 預託: 半年, 1-3年といった期間, 牛を借り(預かり), 飼育すると同時に使役する。通常は, 生後1年未満の子牛または雌の成牛を預託する。費用(飼育費用・斃死したばあいの損害)の分担, 果実(使用収益, 生まれた子牛)の分配の点で, さまざまな変形がある。³¹⁾ この預託はいわゆる家畜小作に相当する。³²⁾

総督府の統計によれば, 1911-12年, 預託制の普及度は北朝鮮で低く, 南朝鮮で高かった(表13)。とくに北朝鮮では低かった。この傾向は, 農家1戸あた

30) 前掲, 肥塚, 41-44頁, 『朝鮮農会報』第7巻第3号, 1912年, 32頁, 同, 第7巻第7号, 1912年, 30頁。

31) 朝鮮在住の日本人農業関係者は牛の預託制に関心をよせ, 種々の調査結果をのこした。たとえば, 『朝鮮農会報』第8巻第8号-第12号, 1913年。

32) この分野のある研究者は預託と家畜小作を区別し, 前者を飼育の委託のみおこなうもの(預託主が受託者に飼育費用を払う), 後者を分益(果実の分配)契約をとこなうものとしている(宮坂悟郎『日本家畜小作制度論』自家出版, 1961年, 4頁)。家畜小作は日本では仔分, 飼い分, 生み分など, 地域によってさまざまな名で呼ばれた(同上)。朝鮮でも同様で, baena(産むの意, 慶尚道), ssiasso(種牛の意, 全羅道)といった名称があった(ソウル市立大学・鄭在貞教授の教示による)。

100年前の北朝鮮経済

表 13 畜牛預託頭数, 1911-12 年平均

		A. 成牛 総頭数	B. 成牛 預託頭数	C. B/A (%)	D. 子牛 総頭数	E. 子牛 預託頭数	F. E/D (%)
北 鮮	咸鏡南道	75,555	3,386	4.5	26,373	1,101	4.2
	咸鏡北道	43,908	1,482	3.4	14,723	479	3.3
西 鮮	黄海道	48,399	9,356	19.3	6,599	4,014	60.8
	平安南道	38,818	4,080	10.5	9,238	1,921	20.8
	平安北道	63,046	10,195	16.2	20,727	4,001	19.3
中 鮮		142,169	41,502	29.2	58,848	25,169	42.8
南 鮮		234,611	68,583	29.2	111,973	37,157	33.2
	計	646,506	138,584	21.4	248,481	73,842	29.7

り畜牛頭数のそれと合致する。すなわち、相対的に牛が多かった北朝鮮では、預託にたよるていどが小さかった。

(3) 資産価値

牛の有用性は耕作，食材にとどまらなかった。朝鮮では一般に，運搬手段として牛車をつかった。その請負は貴重な農家副業をなした。とくに冬作の不可能な北鮮ではそうであった。³³⁾ さらに糞と骨は肥料，皮は軍靴や馬具など皮製品の材料となった。そのため多くの生牛，牛皮，牛骨が輸出された。それらは朝鮮の主要輸出品であった（1908年，輸出生牛は日本に食用・役畜用として1.8万頭，ウラジオストックに食用として5.5千頭）。³⁴⁾

上記の多様な需要は畜牛の資産価値をたかめた。表14のA欄は畜牛総価額の試算結果（1914年），B欄は土地調査にもとづく土地総価額（1918年）であ

33) 『韓国中央農会報』第2巻第8号，1908年，24頁。

34) 前掲，肥塚，102-03頁。1880年代から1911年までの輸出データおよび関連する議論は以下を参照。梶村秀樹「旧韓末北関地域経済と内外交易」梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会編『梶村秀樹著作集 第3巻 近代社会経済論』明石書店，1993年，174-77頁；新納豊「植民地期朝鮮における『畜牛改良増殖政策』の数量的検討」『東洋研究』（大東文化大学東洋研究所）第135号，2000年，53頁。

表 14 畜牛総価額と土地総価額 (千円)

		A. 畜牛 総価額, 1914 年	B. 土地 総価額, 1918 年末	C. A/B (%)
北 鮮	咸鏡南道	3,755	17,800	21.1
	咸鏡北道	3,286	9,198	35.7
西 鮮	黄海道	1,915	74,567	2.6
	平安南道	2,673	34,565	7.7
	平安北道	3,420	27,853	12.3
中 鮮		7,206	264,494	2.7
南 鮮		8,642	452,179	1.9
	計	30,897	880,656	3.5

(注) 畜牛総価額は、家畜市場の売買価額と売買頭数から単価を求め、これを総頭数に乗じて算出した。

る。これによると、前者の后者にたいする比率は、南朝鮮では2-3%にすぎなかった。他方、黄海道をのぞく北朝鮮各地域ではよりたかく、とくに北鮮では20-35%にたった。北鮮の一地域では俗に「老父死すとも一家窮せず、家牛斃るれば一家窮す」といわれるほど、牛が貴重であった。³⁵⁾ 表の数値はこの状況を反映する。

5. 食物消費と教育

(1) 食物消費

北朝鮮では米食は、一部の都市富裕民、平野部の上層民にかぎられていた。一般民の常食は雑穀であった。たとえば、黄海道の米産地でも中流以下の農民はほとんど米食をせず、粟、小豆、稗、麦の混食をふつうとした。副食物は主に蔬菜の塩づけで、春から初夏にかけては山菜の摂取がおおかった。ほかに干魚、牛・豚・鶏・犬肉を副食としたが、その機会はすくなかった。³⁶⁾ 北鮮でも

35) 『朝鮮農會報』第7巻第2号、1912年、11頁。

36) 『韓国土地農産調査報告 黄海道』77頁。

100年前の北朝鮮経済

表 15 朝鮮人の米食調査結果, 咸鏡北道, 1915 年 11 月

	調査人口 総数	常食	年のうち 2/3 食す	年のうち 1/3 食す	冠婚葬祭時 のみ食す	食せず
道全体	491,301	4,822	13,681	31,279	184,398	257,118
内: 清津	4,236	3,468	83 (83)	156 (156)	156	373
: 城津	62,119	632	2,707	13,410 (667)	26,910	18,460

(注) () 内は外国碎米を食する者。

(出所) 『朝鮮農会報』 第 11 巻第 6 号, 1916 年, 67-68 頁。

同様で、粟、稗、麦、ジャガイモ、大豆、小豆などの混食が一般的であった。1915 年の咸鏡北道米食調査結果によると、米を常食とする者は全体の 1 割以下で、その大部分は都市民であった(表 15)。他方、道民の半数以上が、年間をとおしてまったく米を食べなかった。

山菜は、山野に自生するノビル、ワラビ、タンポポ、セリ、キキョウ、カズラ、ハコベ、ナズナ、ヒルガオなどが代表的なものであった。南北をとわず朝鮮半島で飢饉がひんぱんに起ったことは、以下のような救荒食物調理法の発達が証する：葛粉－葛の根を細粉し粥や餅にする、松皮－松の内皮を水にひたし、乾燥させ細粉する、粟稈－細切り、煮煎、白挽きまたは細粉し、春草をまぜて粥にする。³⁷⁾

(2) 教育水準

朝鮮には、書堂とよばれる伝統的な初等教育機関が存在した。これは通常、教師ひとりに 10 人ていどの児童がまなぶ私塾で、わが国の寺子屋に相当し

37) 『朝鮮農会報』 第 7 巻第 9 号, 1912 年, 30-31 頁。1909 年には咸鏡南道文川郡で飢饉がおこった。そのときには、相当数の農民が豆粥、草根木皮で命をつなぐ状態におちいった。移住する者も少なくなかった。『韓国中央農会報』 第 3 巻第 3 号, 1909 年, 47-48 頁。

た。³⁸⁾ 就学児童はほぼ全員、男子であった。1890年代に入ると、知識人による近代的私立学校の設立が活発になった。その大半は小規模の初等または中等教育機関であった。1900年代後半には統監府が普通学校（日本の小学校にあたる）を開設した。1912年現在、書堂は全朝鮮で16,540か所にのぼり、私立学校、普通学校よりはるかに多かった（表16）。書堂をふくむ諸学校の児童総数・人口比は全朝鮮で1.7%であった。後年のデータを参考に学齢児童数を全人口の15-20%と仮定すると、これは8-11%の就学率に相当する。日本では江戸末期、寺子屋の男子就学率はおよそ40%であったといわれる。³⁹⁾ これとくらべ

表 16 私立学校・書堂, 1912年3月末日現在

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮	計
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道			
A. 書堂数	1,652	345	1,606	1,069	1,728	4,568	5,572	16,540
B. 同児童数	15,083	4,040	12,683	10,862	19,881	31,777	47,278	141,604
C. 私立学校数	159	40	145	318	282	321	201	1,467
D. 同生徒 (児童)数	6,694	1,323	3,670	11,629	9,035	18,018	7,163	57,532
E. 普通学校数	12	12	15	21	22	99	125	306
F. 同児童数	1,879	1,516	1,420	2,145	2,165	10,939	12,320	32,384
G. 児童総数 (B+D+F)	23,656	6,879	19,773	24,636	31,081	60,734	66,761	231,520
H. 朝鮮人 人口数(千人)	945.1	436.0	1,010.8	914.5	999.0	3,805.0	5,722.1	13,832.4
I. $G/(H \times 10)$ (%)	2.5	1.6	2.0	2.7	3.1	1.6	1.2	1.7

38) 大きな相違点は教科内容にあった。すなわち、寺子屋の教科は実用的な内容を豊富にふくんでいたのにたいし、書堂の教育はほぼ100パーセント儒学の古典に依っていた。木村光彦「近代朝鮮の初等教育」板谷茂他『アジア発展のカオス』勁草書房、1998年、35-38頁。

39) ドーア (Dore, R. P.) (松本弘道訳)『江戸時代の教育』(Education in Tokugawa Japan), 岩波書店、1973年、300頁。

100年前の北朝鮮経済

表 17 25 歳以上の朝鮮人識字率, 1930 年

(%)

	北 鮮		西 鮮			中 鮮	南 鮮
	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	平安南道	平安北道		
男子	50.4	52.8	60.4	68.1	60.4	42.9	40.4
女子	2.8	3.5	6.9	10.2	7.2	11.1	6.8

(注) 識字者：ハンゲルの読み書きができる者およびハンゲルのほか仮名の読み書きができる者。調査はたんに、口頭で被調査者に読み書きができるか訊ねる方式によった。

(出所) 朝鮮総督府『昭和5年国勢調査報告』第1巻, 同府, 京城, 1934年。

ると、朝鮮の初等教育は発展していなかった。地域的には、最高は西鮮、次いで北鮮、最低は南鮮であった。この傾向は男子識字率のそれと一致する。すなわち1930年の国勢調査によれば、25歳以上の朝鮮人男子ハンゲル識字率は西鮮60%台、北鮮50%台、中鮮・南鮮は40%台であった(表17)。

朝鮮では伝統的に、南とくに慶尚道で儒学がさかんで、そこでは儒生の数もまた多かった。この事実から、初等教育の普及度は相対的に南朝鮮で高かったと想定されるかもしれない。しかしデータはこれをうらぎる。その明確な理由は不明であるが、以下のように考えれば説明がつく：「儒学をになう両班支配層は庶民教育にたいして抑圧的であった」。朝鮮社会では儒学の知識が社会的地位の前提であった。その下では、両班は教育機会を独占することに利益をみいだしたであろう。北朝鮮では両班の勢力がよわかったため、庶民教育はより開放的であった。⁴⁰⁾

6. まとめ

100年前の北朝鮮は、以下のように特徴づけることができる：

- (i) 市場経済の発展がおくれた前近代的経済であった。
- (ii) 農業は粗放的で土地生産性がひくかった。生産性の向上よりも、収穫全失リスクの軽減を重視する農法が発達していた。

40) この仮説に関連した議論は、前掲、木村「近代朝鮮の初等教育」59-60頁参照。

- (iii) 工業は農家副業が大半であった。
- (iv) 鉱物資源は豊富だが、金鉱と無煙炭以外、ほとんど未開発であった。
- (v) 畜牛の重要性が大きく、とくに北鮮（咸鏡道）の経済は畜牛によって成り立つ「牛経済」であった。
- (vi) 住民の食生活は非常にまずしく、米食は例外的であった。教育の普及度も低かった。しかし、南朝鮮よりは高かった。

こうした特徴は、見方をかえると、発展のポテンシャルが大きかったことを意味する。じっさい北朝鮮では1920年代から、農業、鉱工業、さらには林業、水産業がいちじるしく発展したのである。その分析は次稿の課題とする。